

花房台地には多くの戦争遺跡が残されています。
そこで繰り広げられた戦争の記憶を知っていますか。
今回はその舞台となった旧陸軍菊池飛行場の歴史に触れながら
戦争と平和について考えてみます。

菊池飛行場の始まり

旧陸軍菊池飛行場（以下菊池飛行場）は、花房台地にあったことから「花房飛行場」とも呼ばれています。陸軍飛行場として計画され、昭和10年に着工し15年に完成しました（現富の原中央区）。当時は機械などは無く、学生や女性も動員し、スコップやつるはしなどを使つての重労働でした。コンクリートに使う砂利は、迫間川や菊池川からリュックに詰めて運んでいたそうです。

完成後は飛行学校（大刀洗陸軍飛行学校菊池教育隊）、大刀洗航空廠（飛行機整備部隊）が設置され、後に隣接して航空通信学校や病院も併設

（現富の原西区）。敷地の広さは約150畝もあり、県内にあった陸海軍飛行場の中では最大規模でした。多くの部隊が駐屯し、いろいろな種類の飛行機があったといわれています。

菊池飛行場の役割

飛行場の中には、司令部、兵舎、格納庫、飛行整備工場、修理工場、無線施設、燃料庫、弾薬庫、倉庫、食糧庫など多くの施設がありました。ここでは主に、練習機の離着陸、空中戦、爆撃機による目標物への爆弾投下訓練、翼にある機銃の発射訓練、パラシュート降下訓練などが日夜行われていたそうです。訓練中の事故で亡くなった兵士もいたといわれています。

九州のほぼ中心に位置しており、太平洋戦争末期には鹿児島県の知覧飛行場や万世飛行場、宮崎県の都城東・西飛行場などの特攻隊中継基地としての役割も担っていました。全国から多くの特攻隊員

がこの地を訪れ、南の空へと消えていきました。

菊池飛行場の最後

昭和20年4月、アメリカ軍が沖縄に上陸すると、日本本土への攻撃が始まりました。九州各地の軍事施設や都市が空襲され、菊池飛行場も例外なく爆撃の標的となります。

昭和20年5月13日昼頃、昼食の準備に追われていた兵士たちの耳に空襲警報が鳴り響きました。富の原西区にある通信学校では数十名が爆撃の衝撃で生き埋めになり、30人を超える犠牲者を出しました。富の原中央区の兵舎でも多数の犠牲者が出たとされていますが、正確な数字は分かっています。

その後は敗戦まで特攻隊中継基地、本土決戦の要として機能し続けました。戦後は開拓団が入植し、残っていた兵舎などの施設が利用され、今も給水塔（市指定文化財）など多くの戦争遺跡を見ることができます。



各施設の前に整然と並ぶ少年飛行兵



菊池飛行場で給油中の練習機。尾翼に大刀洗の「大」の文字が見える

写真提供：くまもと戦跡ネット高谷和生さん

菊池飛行場が伝えるもの

～菊池が戦場になった日～

少年たちの夢と希望、そして尊い命。全てが打ち砕かれた壮絶な二日間――。

炸裂する爆弾、容赦なく襲ってくる機銃掃射――。
昭和20年5月13日・14日、菊池飛行場は空襲で壊滅的な被害を受け、30数名の若い命が失われました。そのとき少年飛行兵が目にしたものは何だったのでしょうか。

「大空に憧れる、一人の純粹無垢な軍国少年でした」
前田さんは語り始めます。
小学生のころから飛行機乗りになる夢を抱いていた前田さんは16歳のとき、努力の末に少年飛行兵に合格しました。「当時は菊池郡から数名しか入れないほどの難関だったので、飛び上がった喜びました」と振り返ります。

昭和19年4月8日、陸軍航空通信学校菊池教育隊に16期生として入隊。飛行機の操縦や整備、通信を担う兵士を短期間で養成



16歳当時の前田さん

昭和20年5月13日昼ごろ、空襲警報が鳴り響きました。週番兵だった前田さんは、各部隊に

身代わりになった戦友

通信兵だった前田さんは、通常2年で覚えるモールス信号を半年で使えるように叩き込まれました。「とても過酷でした。できなければただの役立たずですから、死に物狂いで頑張りました」。一人前の兵士を目指し、軍務に励んでいました。

事務連絡をするために教育隊本部にいました。一緒にいた戦友の宮内さんと二人で近くの防空壕に入りましたが、一向に空襲が始まらないので、宮内さんと二人分の昼食を取りに炊事場へと向かいました。
その直後、約30機の米軍機が襲来。元いた防空壕がいっぱいだったので、宮内さんは別の大きな防空壕へと駆け込みます。するとその近くに250*爆弾が落とされ、宮内さんをはじめ多くの人が生き埋めになりました。「爆弾と機銃掃射が雨のように降ってきました。第一波が終わった後、外に出て愕然としました。兵舎は破壊され、爆撃で地面に大きな穴が開き、戦友がいた防空壕が埋まっています。助け出そうと手で掘りました。

だが、いくら掘っても出てきません。なんとか数人の顔だけ出して息ができるようになりましたが、すぐに第二波が襲ってきました」

後ろ髪を引かれる思いで元の防空壕に避難し、第二波が遠ざかるのを待ちました。再び救助に向かった先で目にしたものは、機銃掃射の的になった戦友たちの無残な姿でした。「次々と遺体が掘り出され、宮内は一番下に二人分の飯ごうを持ったまま冷たくなっていました。今思うと、私の身代わりになってくれたような気がしてなりません」

その日の夜、壊れた兵舎の廃材を集めて、遺体を火葬しました。火葬場衛兵を命じられた前田さんは、戦友たちを包む赤い



▲戦争体験を語る前田さんのインタビュー動画
<http://youtu.be/2XCPwWRzh64>



Profile

まえだ・ゆうすけ
昭和2年8月25日生まれ。旧戸崎村出身(現今区)。昭和19年、陸軍航空通信学校菊池教育隊に少年飛行兵16期生として入隊。花房(菊池)飛行場の戦争遺産を未来につたえる会会員。熊本市在住。86歳。

Interview
元少年飛行兵
前田祐助さん

炎を一晚中見つめていました。「この日の空襲で飛行場は壊滅的な被害を受け、ほとんどの機能を失いました。17歳で感じた戦争のむごさ、怖さを忘れることはできません」

再び襲い来る米軍機

翌日、宮内さんに代わり週番となった生駒さんと二人で、貴重品を探すために兵舎へ向かいました。兵舎は昨日の空襲で破壊されていました。貴重品が入っていた箱は奇跡的に無事でした。二人が箱を持って帰ろうとしたそのとき、空襲警報と同じ

時に敵機来襲の音が遠くから聞こえました。

2機の米軍機が旋回しているのが見え、二人はクヌギ林の中に逃げ込みます。この後の判断が前田さんの生死を分けることになりました。

「私は林を出たくなかったのですが、生駒は『入るのを敵に見られた。ここにどまるのは危険だ』と言いつ張り、飛び出していきました。やむなく後を追いかけてきましたが、40*ほど走ったとき、音もなく背後から熱風に襲われ、砂が上からザーッと降ってきました。恐る恐る後ろを振り返ると、さっきまでいたクヌギ林が250*爆弾で跡形もなく消えていました。あと10秒そこに残っていたら、私は跡形もなくこの世から消えていたでしょう」

攻撃は続きます。桑畑に飛び込んだ二人を2機の米軍機が執拗に襲ってきました。繰り返し返される機銃掃射。右に左に打ち込まれ、体の真横をかすめました。「13*機関砲で狙い撃ちされ、何度も何度も右に左に逃げ回りました。当たれば即死。そのと

きの恐怖は例えようがありません。機銃掃射がやんだ後、米軍機が急降下してきたとき、パイロットと目が合いました。私と同じくらいの若者がオレンジ色のマフラーをなびかせ、確かに笑ったように見えました。今も脳裏から離れません」
若干17歳の青年が目当たりにした戦争の現実、あまりにも過酷なものでした。「この二日間の体験で私の夢と希望は、完璧に打ち砕かれました」

伝えたい思い

「菊池飛行場には、17歳前後の少年たちが国のために集まっています。一番楽しいはずの青春の一時を命の危険にさらされ、九死に一生を得て生き抜いてきた経験は、平和な時代に生まれた人には理解できないことかもしれません。それでも、戦争がいかに悲惨で恐ろしいものかを伝えていきたい。死んでいった戦友の分まで精一杯話していきたい。そして次の世代へと受け継いでほしい。それが私の願いです」

戦争の恐ろしさを良く知ることが大切です。



泗水中学校1年
荒木琴音さん

小学6年生のときに前田さんのお話を聴きました。菊池に飛行場があったことは祖父と祖母から聞いたことがありましたが、こんなに近くにあったなんて思いもよらなかった。飛行場の遺跡があることも知りませんでした。

お話の中で一番印象に残ったのは、米軍機の爆撃でたくさんの方が生き埋めになり、多くの方が亡くなったことです。改めて戦争は怖いものだと感じましたし、友達を亡くした前田さんはとてもつらかったと思います。学習発表会では、当時の出来事ができるだけ伝えるように、みんなで工夫して紙芝居をしました。

私たちは戦争の恐ろしさを良く知ることが大切だと思います。そして「絶対に戦争をしてはいけない」ということを、しっかり守っていかなければならないと思います。



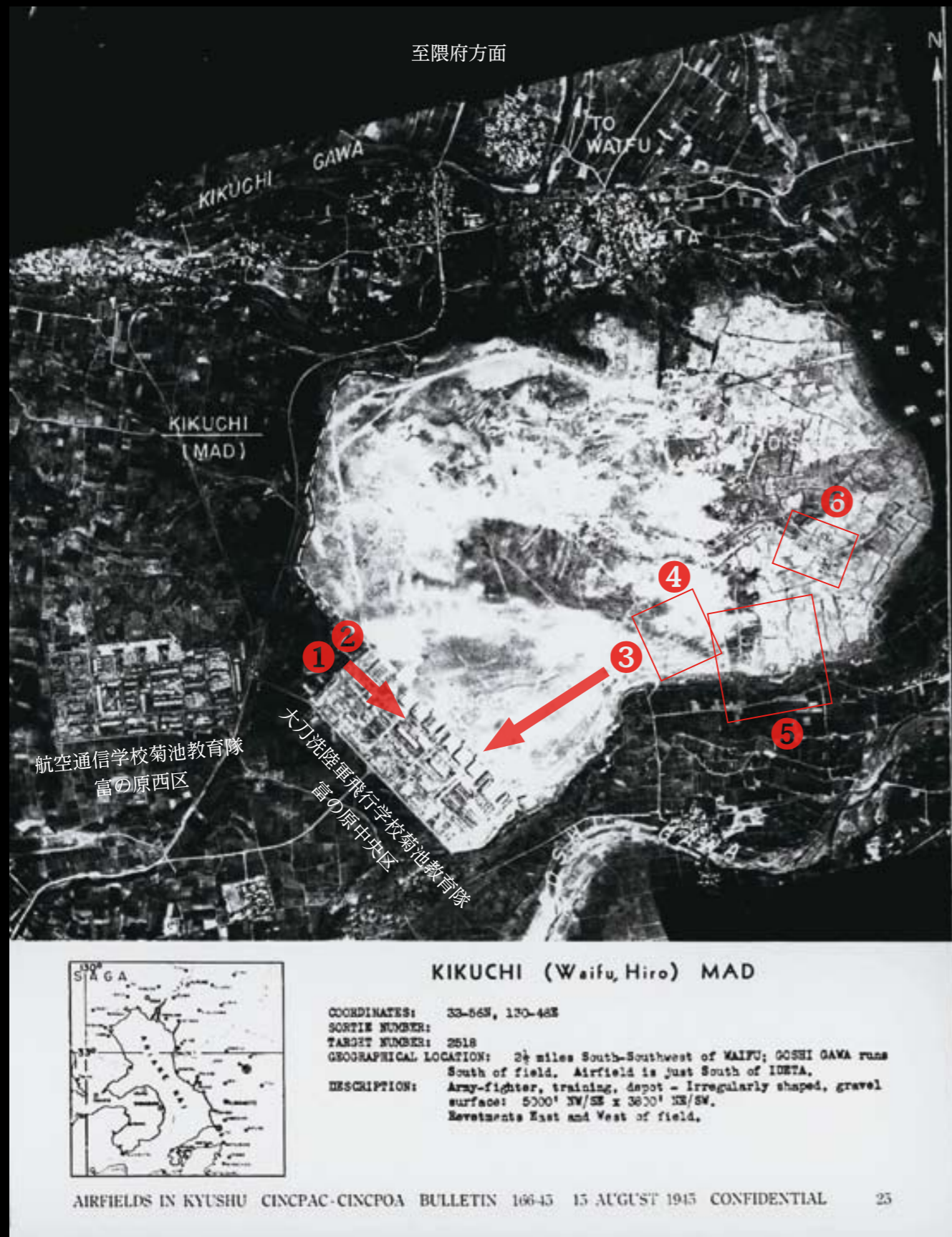
泗水東小学校で講話する前田さん



学習発表会で紙芝居を披露



▼米軍撮影機の航空写真



12の映像はこちらでも視聴できます
 CRITICALPAST (http://urx.nu/ahAc)

▼1945年(昭和20年)5月13日 午後1時頃 動画7秒



1 エプロン(航空機を駐機する場所)で爆弾さく裂



2 格納庫への爆撃

▼1945年(昭和20年)5月13日 午前6時10分頃 動画31秒



3 飛行場沿いの道路と建物配置が一致



4 機銃弾を受ける双発機(プロペラ機)



5 無蓋掩体壕(航空機を防護する施設)の配置、溝の形状が一致



6 無蓋掩体壕の飛行機に機銃掃射

カメラ映像が語る菊池飛行場の戦争

これらの写真は、昭和20年5月13日に米軍機が搭載カメラで撮影した空襲映像の静止画像です。記録されていた映像は早朝と午後1時ごろの2回で計38秒。飛行機への機銃掃射や施設への爆弾投下などの映像がカラーで記録されています。この映像の先に、前田さんたち少年飛行兵が生活を送っていました。

※画像提供：大分県宇佐市の市民団体「豊の国宇佐市塾」

※空襲映像は大分県の宇佐市平和資料館で見ることができます。問い合わせ先 ☎0978(33)1338



第27振武隊 原田 葉 大尉
(限府・享年26歳)

絶筆
 蹶然去郷赴国難
 一飛翔破千万里
 胸中無生死亦無
 疾風天来碎敵艦
 待つこと久し
 愈々大命降下致しました
 お母さんお父さん御喜び
 下さい
 盡忠菊池に生を享け
 た一本の雛菊如何に咲
 き出でますやらご期待
 下さい
 勿疑神州不滅理
 翠楠黄花共不絶
 堂々一菊咲志吐備
 今亦一菊咲冲縄
 畏友松尾敬宇中佐に
 負けない様立派に
 頼忠不絶の傳統ある菊
 池に生れ育つた私は何たる
 幸福児でせうか
 君知否菊池精忠
 二十四代敢不変
 爾来久雖不見花
 誰使黄花得其秋
 身卑賤に生れて光榮
 の御召しを受く 不肖の
 喜びは言ふに及ばず 一門
 一家の榮譽何にたとへませう
 野畔の草
 召し出されて桜哉
 数ならぬ身よにしあらば
 うたかたど
 思ひし賤が花咲可すとは
 お父さんお母さん サヨナラ
 菊池よ永遠に幸あれ
 祖国よ健にあれ
 天皇陛下万才
 出撃前夜六月二十一日夜
 原田 葉

「絶筆」
前略

蹶然去郷赴国難
 一飛翔破千万里
 胸中無生死亦無
 疾風天来碎敵艦
 待つこと久し
 愈々大命降下致しました
 お母さんお父さん御喜び
 下さい
 盡忠菊池に生を享け
 た一本の雛菊如何に咲
 き出でますやらご期待
 下さい

勿疑神州不滅理
 翠楠黄花共不絶
 堂々一菊咲志吐備
 今亦一菊咲冲縄
 畏友松尾敬宇中佐に
 負けない様立派に
 頼忠不絶の傳統ある菊
 池に生れ育つた私は何たる
 幸福児でせうか
 君知否菊池精忠
 二十四代敢不変
 爾来久雖不見花
 誰使黄花得其秋
 身卑賤に生れて光榮
 の御召しを受く 不肖の
 喜びは言ふに及ばず 一門
 一家の榮譽何にたとへませう
 野畔の草
 召し出されて桜哉
 数ならぬ身よにしあらば
 うたかたど
 思ひし賤が花咲可すとは
 お父さんお母さん サヨナラ
 菊池よ永遠に幸あれ
 祖国よ健にあれ
 天皇陛下万才
 出撃前夜六月二十一日夜
 原田 葉

原田さんは大正8年3月30日、現在の限府で生まれました。大正14年に限府尋常小学校に入学、昭和6年3月同校卒業後、旧制九州学院中学校（現九州学院高等学校）から外交官を目指して早稲田大学に進学します。昭和18年、戦況の悪化から学徒出陣。沖縄戦で旧日本軍の組織的戦闘が終わる前日の昭和20年6月22日、宮崎県の都城東飛行場から出撃し、沖縄海上で戦死しました。

部隊待機のため菊池飛行場で約10日間過ごしたことがあり、飛び立つ際に自宅上空を3回旋回し家族に別れを告げ、最後の出撃の場となる都城東飛行場へと向かいました。原田さんの遺詠は、このとき書かれたものが多く残されています。辞世の句だけでなく、自然や人間の命について詠んだ作品もあります。

「叔父の人生の集大成と思われます。私はこの『絶筆』を初めて目にしたとき、しばらく涙が止まりませんでした。出撃の前夜、どんな気持ちで書かれたのか……。死への覚悟を前に『菊池よ永遠に幸あれ』と南北朝時代に武勲を立てた先祖・菊池一族を称え、『お父さんお母さんサヨナラ』と両親や兄弟へ感謝し、『祖国よ健やかにあれ』と愛する国が平和であつて欲しいとの祈りを込めて、最後のメッセージを書いたのではないかと思います。叔父は幼くして母親を亡くし、私の母（葉さんの義姉）を実の姉のように慕っていました。外交官になったら『姉さんいろいろな国に案内する』と約束していたそうです。里津子さんは戦争を知らない世代の人へメッセージを送ります。

「お父さんお母さん サヨナラ 菊池よ永遠に幸あれ」

平和を願い空に散っていった、若き青年の思いに触れる。

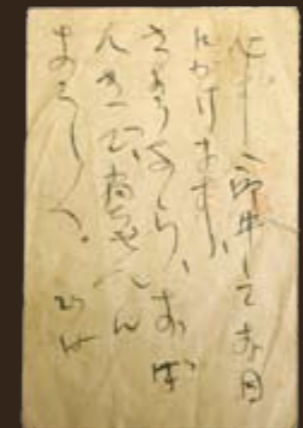
菊池市出身の特攻隊員・原田葉さんは昭和20年6月、沖縄海上で帰らぬ人となりました。原田さんは菊池飛行場に滞在していたとき、多くの句や詩を詠んでいます。その遺詠には、家族やふるさとを思う一人の青年の思いがつつられていました。

手紙から伝わる、特攻隊員の悲壮な決意。



知足寺(極楽寺)住職 高田尚正さん

この手紙は、母のいとこで特攻隊員だった坂本友恒少尉（長崎県平戸市出身）が私の母に宛てて書いた最後の手紙です。坂本さんは明治大学在学時に学徒動員で出征し、昭和20年4月3日、沖縄海上で戦死しました。坂本さんが菊池飛行場に滞在していたとき、何度か我が家を訪れました。私は当時4歳でしたが、上町にあったおもちゃ屋さんに、手をつないで何度も連れていってもらったことを覚えています。はがき1枚ですが、この中に坂本さんの思いと歴史が詰まっているように感じます。多くの若者が国のために自分の生命をなげうって散っていきました。私たちはもっと足元を見て、今ある平和に感謝し、しっかりと生きていかなければならないと思います。



↑坂本さんが特攻出撃前に書いた最後の手紙。以前届いた手紙の筆跡(←)と比較すると、出撃を控えた坂本さんの心情の変化が感じられます。

「必ず命申してお目
 にかけます、
 さようなら、おげ
 んきで、尚ちゃんに
 よろしく。」





木造格納庫跡



格納庫跡



給水塔内部。設備の一部が残っている



木造格納庫跡に残る機銃弾の跡



写真提供：高谷和生さん

教育隊の正門（昭和18年頃撮影）
右の写真は現在の状況



教育隊正門の遺跡。営門と衛兵立哨所の基礎が残されている

戦争遺跡が語り継ぐ記憶

悲惨な戦争の記憶と平和を継承していくために、戦争遺跡を保存していこうという動きが全国で広がっています。戦争遺跡の調査と保存活動を通して、平和の大切さを伝える活動をしている高谷さんに、戦争遺跡の価値について聞きました。

花房飛行場跡給水塔（市指定文化財）

主に教育隊施設の給水施設として昭和15年に設置されました。鉄筋コンクリート造で高さは13.57m。終戦後は国立病院（現在は合志市）の給水施設や入植してきた開拓団の生活用水として利用。一時期は付近数百戸の民家と工場の用水を賄うなど地域の復興に大きく貢献し、平成19年まで稼働しました。外壁や柱には空襲時の機銃弾の跡が数十カ所残っています。

菊池飛行場には現在も多くの遺跡が残されています。

全国の戦争遺産が残る地域と比較しても、その数は多く、状態が良いのが特徴です。特に市指定文化財になっている給水塔は、全国的にも著名な鹿児島県の知覧給水塔より一回り大きく、デザインも優れています。軍関係の給水塔は耐震問題などで解体が相次ぎ、全国でわずか10例しか残っていません。菊池にはこのほか格納庫や油倉庫跡などの施設が点在していますが、これらの遺跡が取り壊されずに残されてきたのは地域の人々の理解と協力があったからだと思えます。現在は菊池の

市民団体「花房（菊池）飛行場の戦争遺産を未来につたえる会」の皆さんが中心となって保存活動を行っています。

「モノ」である戦争遺跡は、悲惨な戦争の記憶を半永久的に語ってくれます。ここに遺跡保存の意義があります。給水塔を平和と戦後復興のシンボルとして、二度と戦争を繰り返さないという原点を確認し、私たちは世代を超えて戦争の記憶と平和を継承していかなければなりません。菊池飛行場は、県内の旧陸海軍飛行場の中では最も規模が大きく歴史も古いです。航空機の整備部隊があったのも県内ではここだけでした。戦争が広がるにつれ航空機の種類が増え、部品も増えていきます。機種ごとに整備の仕方も分かれるので、対応できる優れた技術と環境が必要でした。その中核を担ったのが菊池飛行場です。日本の陸軍航空の歴史は菊池飛行場抜きでは語れません。このような歴史的背景も、遺跡などの資料から見えてくるのです。

今後は証言や活字、映像、遺品、遺跡、これらをうまくつなぎ合わせて戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えていくことが必要だと考えています。

これら全てが残っていて、県内で一番分かりやすいのが菊池飛行場です。そこに最大の価値があります。ここに最大の価値があります。

悲惨な戦争の記憶を半永久的に語り継ぐ、ここに遺跡保存の意義があります。

Interview

高谷和生さん



Profile

たかたに・かずお
昭和29年9月12日生まれ。肥後考古学会幹事、熊本の戦争遺跡研究会理事、熊本戦争遺跡・文化遺産ネットワーク理事・事務局長ほか。現在「地域に残された戦争遺産を通して平和の大切さを伝える活動」を展開中。玉名市在住。59歳。

戦争の記憶と 平和の尊さを未来へ



④富の原保育園の隣にある少年飛行兵戦没者の慰霊塔。老朽化に伴い昭和63年に倉沢さんが建て替えた ⑤富の原中央区と西区では毎年、元兵士や遺族、住民らと共に合同慰霊祭が行われている（写真は5月13日にあった富の原西区の慰霊祭） ⑥富の原西区は前夜祭に竹灯籠やジャズコンサートを開催。子どもから大人まで地域の住民が鎮魂に訪れた。

月日の流れとともに、戦争を知らない世代が増えました。一方、戦争遺跡や体験者の数は年々減り続けています。そんな中、戦争遺跡を保存し、戦争の記憶と平和の尊さを後世に伝えるために活動する人たちがいます。

戦後70年近くがたち、当時の建造物や遺跡が解体され、戦争体験の語り部も減り、平和への意識も風化しています。これに危機感を持った地元住民や元少年飛行兵などが平成20年、平和維持のために遺跡を保存することを目的に「花房飛行場の戦争遺産を未来につたえる会」を発足しました。戦争遺産の研究と検証のほか、市文化財である給

水塔の保存運動、見学会、講演会、平和教育支援などの活動を行っています。終戦後、開拓団の一人として富の原に移住した倉沢さんは、「給水塔などの遺跡は、単に戦争遺跡というだけではなく、今まで私たちの命を支えてくれた大切なものでもあります。戦争の記憶と共に、復興と平和のシンボルとして後世に伝えるために保存活動を始めました」と発足当時の思いを語ります。

Interview



花房(菊池)飛行場の戦争遺産を未来につたえる会 菊池飛行場に関する情報提供、活動内容に関する問い合わせ先 倉沢(富の原保育園) ☎0968(38)2252

代表 倉沢 泰さん



事務局長 小山内 稔さん

課題と活用

発足から2年後、活動の成果が表れ、給水塔が市文化財に指定されました。戦争遺跡の文化財登録は県内で初めてのことでした。遺跡の長期的保存に向けた大きな一歩となりましたが、同会事務局の小山内さんは「老朽化が著しく、外壁の表面が剥がれ落ちるなど安全面での対策が必要な状態です。適切な維持管理ができる体制づくりが今後の大きな課題」と保存していくことの難しさを感じています。

そのことを知らない人が多いのが現状です。当時を知る人も高齢化しています。誰も知らない、伝える人もいない、記録もない……。菊池で起こった戦争の記憶が失われてしまう前に、保存して伝えていくことが大事なことです。「衛兵立哨所の復元計画や劇団の公演など、他団体との連携も図っています」と小山内さん。さらに「誰にでも見てもらえるように」と、これまでストックしてきた資料を展示するための資料室も準備中。場所は泗水町特産物センターの一室で、8月15日(金)のオープンを目指しています。「ここに来れば誰でも菊池飛行場について知ることができ、そんな場所になりたいですね」と口をそろえました。

永田さんは、市民に菊池飛行場が知られていないことも課題の一つと話します。「これだけ戦争遺跡が残っている地区は全国でも珍しく、しかも貴重で立派な文化財もあります。しかし、



会員 永田 昭さん



1 2 勝又さんが製作した菊池飛行場のジオラマ(地形模型)。長年の調査を基に忠実な再現を心掛けた。泗水総合支所の一角にミニ資料館を開設し展示中 3 ジオラマを使った平和教育支援授業。子どもたちにも伝わりやすい 4 憩いの森公園にある遺跡マップ 5 オープン予定の資料室がある泗水特産物センター



「菊池飛行場と戦争の歴史を子どもたちにも分かりやすく伝えるにはどうしたら良いか考え、ジオラマを作ることになりました」。勝又さんは学校教諭の傍ら、空いた時間を使ってジオラマを製作。主に市内の小中学生と高校生を対象とした平和教育の学習支援で活用しています。「始めは関心がなさそうな子どもも、だんだん興味を持つてくれるようになりますね」。昨年10月、泗水総合支所の一角にミニ展示場を開設し、戦争に関する資料と一緒に公開しました。「菊池飛行場と特攻隊との関係を通して、生と死の葛藤のなかで生きた人たちの姿も伝えていきたい。そこから命の尊さ、平和の大切さを学んでほしいと思います」



会員 勝又俊一さん

平和教育で伝える

平成25年度 菊池市 戦没者追悼式

主催 菊池市英霊顕彰会

平成26年度「誓いの言葉」代表



七城小学校4年
中村 穂乃花さん



七城小学校3年
村上 蓮くん

誓いの言葉

第二次世界大戦が終わり69年を迎えました。家族を残し戦争へ行った人々の気持ちは、どれほど辛いものだったのでしょうか。そして、残された家族は、どんなに悲しかったのでしょうか。なぜ人々を不幸にする戦争は起こるのでしょうか。

世界中では、今なお戦争が起こっています。戦争によって生活を奪われ、悲しい思いをし、苦しんでいる人たちがたくさんいます。本当の平和とは、いつやって来るのでしょうか。

私たちは、幸い戦争を経験したことがなく、今の平和を当たり前のように感じて生きています。家族がいて、学校で学び、友達と遊ぶ、そんな平凡だけれど楽しい暮らしができることこそが平和だと思います。

僕たちは、この平和が永遠に続くように、そして世界中が平和であるように願います。そのためには、平和学習で学ぶこと、戦争や世界の国々の歴史について学ぶこと、おじいちゃんやおばあちゃんから聞くこと、そして何よりも身近で起きているけんかやいじめを見過ごさないこと、そんな小さな一歩から始めます。

今の僕たちにできることは、小さな一歩かもしれないけれど、いつの日か必ず訪れる世界の平和のために、僕たちは決してあきらめません。

今、未来のために立ち上がり、本当の平和を築いていくことをここに誓います。

世界中の人々が平和であるように、世界中の人々が笑顔で過ごせるように。



世代を超えて

平和への祈りを――

毎年8月15日、戦没者追悼式が行われています。ここでは子どもたちが平和への祈りを込めて、誓いの言葉を述べています。平和な時代を生きる子どもたちが、戦地へ向かった人や残された家族への思いをせながら、平和の大切さを切々と綴っています。平和教育で学び、家族や戦争体験者の声に耳を傾け、しっかりと受け継ぐとする子どもたちの思いが感じられます。

菊池飛行場の戦争遺跡は、戦争の爪跡だけでなく、そこに生きた人々の歴史も伝えていきます。前田さんの言葉には、教科書では伝わらない戦争の真の姿がありました。その言葉を裏付ける映像記録には、戦争の恐怖そのものが写し出されていました。生と死のはざままで揺れ動く青年と、送り出さねばならなかった遺族の思いに触れ、改めて命と平和の尊さを胸に刻んでいます。

このまちで起こった戦争の記憶に触れてみてください。そして、見て聞いて感じたことを、次の世代へと伝えてください。平和への扉を開くことができるのは、今を生きる私たちからです。

平成26年度菊池市戦没者追悼式

大戦による戦没者の慰霊と、世界の恒久平和を祈るために開催します。市民の皆さんのご参列をお待ちしています。

とき 8月15日(金)

午前11時50分

ところ 菊池市文化会館大ホール

問い合わせ先 福祉課
☎0968(25)7213